

2歳児フレイルールの遊びをめぐる考察

— 母子一緒に遊ぶからスターとしてみる —

西ノ内 多恵 (白梅学園短期大学)

<はじめに> 過去5年間の経験によると、年間の中
 の中では、どの子もフレイルールの大好きになるが、
 年度初めには動揺して大泣きする子が何名かはいる。
 従来は慣らし保育期間を設けたとはいえ、1回目から
 いきなり母子を引き離した。56年度は子どもが慣れ
 るまで母子一緒に遊び、慣れた子どもから順に母から
 離して保育した。本論は、この試みについて学んだこ
 とを明らかにし、次年度からの保育の参考としたい。

<目的> 一般的な予測として、母親の早い子は①
 月齢が高い②兄弟が在園している③近所の友達と来る
 ④母子関係がよい、逆に跨向のかかる子は①低月齢
 ②年子③過干渉または過保護に育てられた子④分離不
 安の強い子どもなどが考えられる。これらの予測に対して
 実際の姿はどうであったかを考察し、母親理解、子ども
 理解の中をひろげたい。

<対象> 白梅幼稚園2歳児フレイルールーム (14名)

<保育条件> 週1回の保育 通常の保育時間2時間

(9:15~11:15AM) 5月~3月 36回 保育者2名

<観察期間> 56年5月8日~10月30日 19回

<方法> 個人記録をもとにした保育日誌、母親との面接
 の記録、写真を係り、観点に従って分析する。

<結果> 表I 母子共の遊びから母親から要した回数

氏名	性別	保育回数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
A	女	5/9	△	△	△	○															
B	男	5/10	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
C	女	8/18	△	△	△	△															
D	女	8/20	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
E	男	9/28	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
F	男	9/13	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
G	女	9/23	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
H	女	10/3	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
I	男	10/4	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
J	女	10/20	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
K	男	12/18	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
L	男	5/10	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
M	女	3/14	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
N	女	3/30	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△

△印は隣室
 ○印は母子一緒に
 △印は隣室
 ○印は母子一緒に
 △印は隣室
 ○印は母子一緒に
 △印は隣室
 ○印は母子一緒に

<考察I> 母親から離れるまでの期間と月齢の関係
 月齢の高いB男が18回を要し、月齢の一番低いN女
 は3回目から母離れした。今回の試みの範囲でいえる
 のは、母子一緒に遊ぶ標準回数は2~4回である。こ
 れに対して月齢の低いグループのK男、L男、M女(当時
 2.5, 2.3, 2.2歳)は約2倍の回数を要した。この結
 果について単純に回数だけから見ると、月齢の低い子
 は慣れるのに時間がかかるといえるが、のちに述べる
 ように母親の側に子離れし難い様子があり一概にいえない。

<考察II> 近所から一緒に来る友達との関係
 1組はD女とN女で、いつもペアで遊び、遊びの対
 象も似ており、月齢の高いD女がN女をかまわってやる
 関係が続いた。2人の母離れが早かったのは、2人の
 関係の継続も一要因であろう。もう1組はC女とE男
 で、初めは一緒に遊んだが、遊びの対象が違ってきて
 C女が他の女の子と遊び始め、2人の関係がうすくな
 った。これはE男が不安定になる時期と一致する。

<考察III> スムーズに離れる母子について
 A女、C女、D女、I男たちは、好きな遊びが早く
 からあったり、母親が遊ばせ上手とか、子どもが遊び
 始めると、身を引いて見守るかしていた。兄や姉をフ
 レイルールに通わせ経験をもつC女、D女の母と、
 幼稚園教諭であったH女の母は、保育者が子どもにと
 う働きかけるかを見ながら、自分流にヒリ入り遊ばせ
 ていた。

<考察IV> 密着型の母子について
 G女、K男、L男、M女の母たちは、心理的にも距
 離的にも、わが子にべったり寄り添う遊ばせ方をした。
 子どもが1つの遊びから次の遊びへと移動するとその
 後を追う。ままごとだと、母が茶椀と箸をもちお手玉
 などを挟んで子どもに食べさせる。子どもが小木馬に
 のると、漕げるかどうかを見届ける前に、ゆすってや
 るなどして、見守るというのがむづかしかつた。従っ
 てそういう関係に保育者がかかると余剰がなく、あつ
 たとしても子どもは触れられるのを厭った。母母子
 関係を作るのに手向くのでは、と考え、保育者が母
 たちに、子どもが何かの遊びを始めたら、少し余裕を
 もって見守るようにすすめた。このアドバイスは、G
 、K、L児の母たちに迷いを与え、子どもから離れな
 くてはという意識と、離れるのが不安だという葛藤を

もたらし、それが子どもに反映して、親を追った。た
だM女の母は、あなかも「この時間を逃すとあとでと
り返しがつかない」かのように、遊びの個人レッスン
と名付けたいほど熱心に遊ばせた。保育者のアドバイ
スに対しては、年子の弟に手がかかるので、その分を
M女と遊べるときに遊ばせたいときばかりしていた。
M女は母親離れまでに7回要したが、またその間、保育
者は殆んど介入できなかったが、8回目以降、母と離
れてからは毎度末まで極めて情緒が安定し、遊びにも
積極的で、保育者や他児との関係もよい。

＜考察V＞ じくじくコースをたどった子どもたち

1) B男の場合 年子の妹がいて、妹同伴で母が入室し、
母はB男と遊ぶというよりも、下の子の遊びに気をと
られることが多かった。家庭では、母の手が妹にかか
る分、祖母がB男をかあいがっている。家で好きな玩
具をフレイルームに持ってきてもよいとすすめたが、
本児は「お友達にとられるから」と断った。運動能
力が発達してきて体のこなしも上手なので、フープに
よる伴遊遊びをB男中心に行なった。わらべうたの「だ
るまさん」の、にらめっこでの百面相を喜び、泣い
ていても、これを遊ぶと気がまぎれて笑った。3歳前
後に始まる母子分離の、手前の一時期、極端に分離不
安を示し、母親をまとめさせる子がいるが、B男のは
あい、ちょうどその時期と重なったようである。それ
を母に話し、1年かかるつもりで経過を見守ってほし
いとアドバイスした。それまでは「泣かないで」とB
男に要求していた母は、膝をすえ「泣いてもいいのよ
」とB男にいったが、これが契機でB男は母から離れら
れた。しかし、保育者とのつながりができた後でも、
苦手を友達の存在(後でのべるF児)をいく意識する。

2) E男の場合 E男は姉が年長組にいて、母と幼稚園
に通い慣れており、初めはスムーズに母親離れしたたけ
に、7回目途中から不適応をおこしたのは、母親に
とってショックだったようである。母親の心配は、家
で、姉やC女など女の子との遊びが主なので男の子と
遊べるかどうかにあった。C女との関係は考察IIでの
べだが、そのことと、次にのべるF男の影響などが不
適応の原因と思える。来園はするが入室を拒むので母
と園庭で遊んだ。E男は車が好きななので、入室したと
きは、車を遊びのテーマにし、フープをハンドルにみ
たて、買いものや、途中でガソリンスタンドに寄り、
給油と洗車の遊びをした。この遊びは他児の興味もい
き、特にF男とE男がいつも参加し、その交流の中で
フレイルームになじんでいった。他の契機としてE男
の家族の声援も見逃せない。左園する姉は「困ったら

即けに泣いてあげる」「男の子なのに泣き虫は嫌い」
また父親は「お父さんだって会社行って泣かないよ」
とはげました。家族がE男に、こうあってほしいと願
う像を示し、本人が素直にそれを受け入れ、努力して
いる。「Eはもう泣かないの」と保育者に告げてからは、
安定した状態が続いている。「泣いてもいい」と母にい
われて変っていったB男とは対照的である。

3) F男のはあい 本児もスムーズにいくかに見えだが、
母親離れした途端に、遊ぶ友達を後から押す、積木で叩
く、指をピストルの形にして、他児の目を突こうとす
るなどのふるまいが目立った。集中して遊ぶ対象が
見つからず、保育者や他児の動き、ことは、ぼろ玩具
など、耳にきこえる、目に写るいちいちのことに気が
散った。保育の途中でジュースやコーラをほしがり、
お茶ではだめで、地団駄ふんで泣いたりした。欠席も
多く入室を厭がるので途中で母親に付き添って貰った。

面接でわかったことは①母の叱り方がきつい②父親
とフロレスごっこをして遊ぶ③好きな遊びは電車の操
作④商店経営の祖父母の家が近く、ここでよくを過し、
商売柄泣かれると困るので、気ままにおやつや飲みも
のを与えている、などであった。

「子どもは大人の認める方向に育つ」という見方を
挙げて、本児のいいところを認め、気持のうえで十分
本児を受け入れてあげるようにアドバイスした。また
フレイルームでは、12月に計画していたルールセッ
トを直し、F男の遊びのきっかけを作った。F男の動搖
は、フレイルームの生活が家庭とくらべきやうくつで
あると感じたことと、母親の性・娠も原因の一つであらう。

＜まとめ＞①2歳児クラスでの、親子一緒に遊びから
親離れするまでの期間の長短は、月齢に関係するとい
うよりも、個人差と母親の態度にかかわるといえそう
である。②母親が子離れするのに迷いや不安があると
それが子どもに影響する。③きょうだいがいる本人
が親と園に通い慣れていても、フレイルームに慣れる
期間の長短にはあまり関係が認められない。④年子の
むつきさを親が、十分意識して育てていけば、母離
れはスムーズである。⑤人間関係のうえで、大人なら
誰でもよい子と見慣れない大人や、苦手な子どもの存在
に敏感な子がいるので保育者はその子に合った配慮を
する必要がある。⑥体調をくずしやすい子、まばらに休
む子は慣れるのに手間どる。⑦好きな遊びがあるかど
うかも、慣れていくうえで大きな契機となるので、保
育者は事前に、親から聞いておく必要がある。⑧今回
は、フレイルームでの親子一緒に遊ぶ方を事前にオリ
エンテーションしなかったで、次年度はそれを行な
い、本年度との比較を考察してみたい。